色彩学　第1巻　第1号　2022年　44－45

国際会議報告

# 第1回中国伝統色彩研究青年論壇2021への参加報告

Report of Participation in the 1st Youth Forum Research on Traditional Chinese Color 2021

國本 学史　慶應義塾大学，埼玉大学，黄岡師範学院
Norifumi Kunimoto　Keio University, Saitama University, Huanggang Normal University

## 1. 第1回中国伝統色彩研究青年論壇2021

筆者は，2021年12月4日，中国広東省汕頭市汕頭大学で開催された，「第1回中国伝統色彩研究青年論壇2021」に参加した．本稿で当該の参加報告を行いたい．

図1. 第1回中国伝統色彩研究青年論壇
会議ポスター，Webタイトル画像

本会は，筆者が別稿で報告している「中国伝統色彩学術年会」の代表責任者である牛克誠氏が，2020年の学術年会で「若手研究者のため」として提唱されたシンポジウムである．牛氏と汕頭大学肖世孟教授，同大学陳彦青教授等の尽力によって，約1年後の2021年12月に早くも開催が実現した．北京の学術年会とは異なり，筆者は招待講演者ではないが，同論壇の組織委員として招請されて参加した．同論壇には，日本建築装飾技術史研究所所長・国立台湾芸術大学客座教授の窪寺茂氏が顧問として参加されている．同会の組織委員には，中国伝統色彩学術年会に招聘されている中国の研究者達も，多くが顧問・委員として参加している．本年度は外国からの参加者への対応の準備が不十分であることについて，同会秘書長（代表責任者）の肖世孟氏から筆者に説明があった．来年以降，国際的な交流の発展を期待したい．

図2　汕頭大学肖世孟教授による開会の挨拶

## 2. 会議のオンライン配信

新型コロナウィルスの感染拡大への警戒も手伝い，会議は現地（汕頭大学長江芸術デザイン学院中国伝統色彩研究センター）開催ながら，オンラインでも配信が行われ，Web経由の講演者も複数名見られた．会議配信は騰迅会議（外国語版ではVooV Meeting）の「騰迅のネット会議検討室」を利用した同時配信であった．会議の案内は下記サイトを参照，2021年12/17確認 https://mp.weixin.qq.com/s/Reb4WKKqAMpGa3h-q6J-3A）．負荷分散のために分けられたWeb会議室内での同時接続人数は500人程が上限であったが，事務局によると総参加者数は5000名を超えるという．人文科学系の学術会議の同時接続数としては，かなり多い参加人数である．会場も満員の様子が見られ，若い世代にも伝統色彩研究への関心の高さがあると感じられる．

図3. 当日の会場の様子
写真提供：汕頭大学肖世孟教授

別稿で紹介した「中国伝統色彩学術年会」と同様に，本会議開催にあたって，著名な研究者等によるコメントが会議冒頭に動画で紹介された．上記年会でも挨拶された方がおられ，本会議と同会の関わりが見られる．

## 3. 会議のテーマと構成

本会は統一テーマが提示されていないが，第1場が「色彩観念」，第2場が「色彩文化」，第3場「色彩科学と応用」，第4場が「白色について」と分けられた．各セクションにおいては，講演者が4-5名であり，そこに主持人（司会）と評議人（評価）それぞれ1名ずつが付く形は，別稿で報告した伝統色彩学術年会のシステムと同様である．ただ，開催が1日に限られることもあり，質問は時間的制約によって限られたのは致し方がない．講演者は総勢16名を数えているが，本年の講演は中国からの参加者のみであった．今後は通訳体制などの充実により，日本や中国以外からの参加者が増える可能性もある．

講演の内容としては，建築装飾から色彩体系への視点，五色についての検討や，中国絵画における色彩，日本のかさね色と唐時代の服装との比較，中華民国時代の顔料・染料の生産の変化，龍泉窯青磁の色彩，中国における白色の文化的表象，といったタイトルが掲げられ，色彩芸術・文化に関わる多彩な研究が提示されていた．日本のかさね色の検討や，西洋美術における色彩表現と中国の色彩といった，比較研究の視点は重要であり，今後の国際的研究の発展も待たれる．

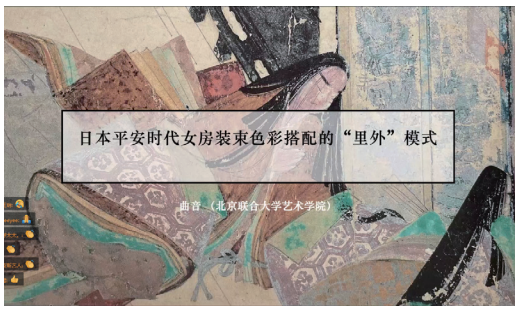


図3. 曲音氏「日本平安時代女房装束における”里外”配色様式について」

## 4. 若手研究者の活躍

若手研究者（大学所属等の研究者に限定されていない）のために，という目的で開催された同論壇であるが，若手研究者のみならず，ある程度キャリアを積んだ研究者の講演も見られた．若手・中堅の研究者の講演内容は見応えのある内容であり，伝統色彩学術年会でも論じられた内容・議論が，本論壇の講演者達に与えた影響を感じさせる．伝統色彩学術年会に招聘されていた，あるいは今年招聘されている研究者の講演もあり，優れた知見が幅広い世代に広く公開されて影響を与えて行くことは，今後の中国における伝統色彩文化研究の発展と継続を予感させると言える．伝統色彩研究のような，文化・芸術にかかわる研究領域が振興されている事は，日本から見ると羨望の的である．新型コロナウィルスの影響もあり，文献研究が多く見られたとはいえ，中国には四庫全書関係の優れたデジタル・Webデータベースの存在もあり，文献資料検証や考察は充実した内容であった．

図4. 呉端涛氏「民国時代の色料業の生産と経営」

日本を含む東アジアの文化圏における色彩視点や，西洋と中国の色彩比較，植物の色彩，現代芸術の色彩検討等が見られ，「中国伝統色彩研究」という論壇の名称ながら，枠組みに縛られずに広い講演内容が示されていた．同論壇が色彩を共通項として，若い研究者の着想に自由度の高い発表の場を提供している点を高く評価できる．

最後に，汕頭大学の陳彦青氏より閉会の挨拶があったが，陳氏はかつて「中国伝統色彩とは何を指すものなのか」という視点を学術年会で提示されており，若手研究者にも，同種の視点を喚起しようという意志が感じられた．今後の充実や，東アジアを中心とする国際的な研究交流の場としての発展を大いに期待したい．

図5. 汕頭大学の陳彦青教授による閉会の挨拶